伊藤圭介（１８０３−１９０１）

伊藤圭介は、享和３年（１８０３年）名古屋呉服町に生まれた。父は医家西山玄道である。名は清民、号は錦という。幼児より父兄に従って儒学と医学とを学び、また植物学を研究することを好んだ。文政３年（１８２０年）１８才にして医業を開いた。１９才の時、京都に遊学し、洋学を学び、文政１０年（１８２７年）２５才の時、長崎に赴き、ドイツ人シーボルトに植物学を学んだ。これが生涯を通じて学問研究の一転機となり、２７才で初めて、「泰西本草名疏」を訳述刊行したのである。以後著書は１７種に上る。この中、有名なのは、「日本産物志」「日本植物図説草部」等である。

また医家としての功績の優なのは種痘を始めたことであり、嘉永５年（１８５２年）５０才の時、尾張藩主から種痘法取調を命ぜられ、以後尾張藩の医術に尽すところ大であった。また郷土の博物学の啓蒙にも努力した。

明治１４年（１８８１年）東京大学教授に任ぜられ、同２１年（１８８８年）理学博士の学位を受けた。また東京学士会院の初代会員となった。明治３４年（１９０１年）東京大学名誉教授、男爵を授けられ、同年９８才を以って逝去した。

明治初年（１８６８年）廃藩置県の際、蘭法医学の必要を強調、愛知県に対し、同志と共に西洋医学を講ずる学校の開設を建議し、これが容れられ、名古屋藩の元評定所に初めて医学校が創設された。これが今日の名古屋大学の濫觴（らんしょう）である。

「伊藤文庫図書目録」名古屋大学附属図書館（昭和３１年３月２０日）解説より抜粋・修正